



新年明けまして おめでとうございます。

院長 田中 康博

新年あけましておめでとうございます。

令和6年(2024年)を迎えご挨拶申し上げます。

今度こそコロナ感染症が収束してきたようです。長いトンネルを抜けたのでしょうか。やっと通常の日常に戻りつつあります。しかしながら救急患者数は例年通りに回復しているものの一般の予定入院患者はまだ戻ってきていない状況が続いています。

地方(鹿児島市以外)の医療は人口減少や医療機関の撤退や医療スタッフの高齢化でだいぶ体力が落ちてきつつあります。それにコロナ禍で一気に拍車がかかったのではないのでしょうか。一方鹿児島市内への急患搬入件数が増えてきていますが、次に鹿児島市の人口が減少に転じると地方と同様の現象が起きる可能性があります。鹿児島の医療を守るために、今こそ急性期医療から慢性期まで新たな仕組みづくりをすべきと考えています。まことの地域医療構想です。強いネットワーク、情報の共有化などがポイントになるのかもしれませんが。医療行政、医師会、大学病院、公的病院などが独自にバラバラで病院の在り方を考えるのではなく、担っていく分野をはっきり指し示し、与えられた分野を、責任をもって構築することで鹿児島全体の医療を守る形が作れるかが鍵です。鹿児島医療センターは、救命救急医療と高度な最先端医療を行っています。許されるのであれば、この分野の専門性を徹底することで鹿児島の医療に貢献したいものです。

「がん」について

手術、薬剤、放射線療法などのがん治療の進歩で、完治、緩解など長期生存できる時代になってきました。今はがんとともにどう生きるかを考える必要があり、治療のみならず、仕事と病気の両立支援や緩和ケアなど全人的な治療を充実すべきと考えています。当院も今までにまして努力していきます。耳鼻咽喉科では今話題の光免疫療法も行っています。

「脳卒中」について

非侵襲的なカテーテル治療(血栓回収やステント、コイル塞栓術)が増えています。安全に迅速に治療でき、一刻を争う疾患に最も適した治療の一つです。今年は脳血管専用の血管造影室を増設し、もっと貢献していきたいと思っています。

「心臓大血管」について

従来の治療に加え、カテーテルによる大動脈置換術(TAVI、2023年12月で670例)や僧帽弁形成術(Mitraclip、30数例)がかなり増えてきました。従来の治療よりは侵襲が少なく、より安全で効果のある治療で高齢者や基礎疾患を有するさまざまな患者さまに対応可能です。

「疾患横断的治療」について

糖尿病 腎臓病 口腔内ケアなど様々な基礎疾患を持っている患者さまへの対応が可能です。

真つ当な医療を皆さんと一緒に考え、病気に立ち向かっていきましょう。今年もよろしくお祈りいたします。

幹部年賀状



副院長
島 均

明けましておめでとうございます。

昨年もコロナに振り回された一年でした。コロナとの戦いでは、克服したとはいえませんが、5月から5類感染症に分類されました。いわゆるインフルエンザ並みと、定義上はなりましたが、当院でも以前ほどではないにしても、院内感染対策、また急患時の対応などすぐには切り替えるわけにはいかず、徐々に対応策変化させています。感覚的にはコロナ感染症よりも前ほどの感染力や、重症度などの点でインパクト薄れているように思います。おそらく数年後には本当の意味でのインフルエンザ並みになるものと想像します。原稿を記載している現在でも、未だに院内の面会制限は予約制で二人までであり、とてもコロナ以前と同等とは言えません。国立病院機構を取り巻く状況も大変厳しいものがあります。特に医療経営上の問題は深刻であり、世間で誤解されている国からの助成金はほぼ0と言ってよく、病院立て替えはおろか、敷地内ヘリポート、新たな立体駐車場建設、新規大型医療機器整備などほとんど手付かずで放置されたままです。このように物質的な面では決して恵まれた状況ではありませんが、ボロは着てても心は錦、職員一同心を一つに努力しております。今年も例年にもまして笑顔で喜んで急患引き受ける所存です。加えて今まで通り皆様の期待に応える、頼り甲斐のある病院として活動して参ります。最後に皆様のご多幸をお祈りして新年のご挨拶とさせていただきます。



統括診療部長
松崎 勉

明けましておめでとうございます。

昨年も、当院統括診療部医師が多方面でお世話になりました。また、がん診療連携をはじめとするがん診療部門におきましても大変お世話になり有難うございました。

さて、医療DX、自己決定支援、人生会議（アドバンス・ケア・プランニング：ACP）の推進と様々な課題への取り組みが求められています。この一年、コロナ禍からの解放が見えてきましたが、これらの課題に対しての私自身の評価を漢字一字で表すと、滞（退？）であったように思います。マイナンバーカードの保険証利用、電子処方箋等で個人の健診情報や検査データ、服薬情報が医療現場で共有されることで、より正確な情報に基づいた診療が期待されますが、まだまだ、普及に時間がかかるようです。また、医療DXを進めるうえで、AIへの対応は近い将来必須になるものと考えられます。その発達はすさまじく、どこまで導入を認めるか国家的議論が早急に必要となっております。当院でもモバイル端末による働き方改革への対応、情報共有への可能性を試みていく予定です。皆様の施設との施設間連携への運用、今後の課題への対応に役立てることを目指していききたいと思います。

一方、ACPの推進は、がんに限らず医療現場、社会全体で必要性が叫ばれております。県の事業への参加や当院でのワークショップの開催等、患者さまの意思に基づく医療の展開を進めてきました。しかしながら、先日開催した「がん市民公開講座」でのがんサイバーの方々の方々の声に耳を傾けるとまだまだやらなければならない課題が山積していることに多くの職員が気づかされ、解決に向け取り組んでいこうと思っております。

デジタル化の推進と心に寄り添う医療の展開を目指して、大スターの活躍にあやかって当院にとっても「翔」の一年としていきたいと思っております。

本年も、どうぞご指導の程宜しくお願い致します。



臨床研究部長
城ヶ崎 倫久

あけましておめでとうございます。

臨床研究部は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の連携大学院になっており、受講を希望する大学院生がいれば、講義をすることになっています。昨年は3人の大学院生を迎えました。当院所属が1人、鹿児島大学所属と市立病院所属が1人ずつでした。3人のうち1人が外国の方だったので講義や大学院生の発表はほとんど英語で行いました。毎回楽しく、しかしながら内容はレベルが高く、3人の大学院生と時間を過ごすことができました。講義やレポートの提出は大変だったと思いますが、皆さん優秀でした。ここで学んだことがそれぞれの臨床で役立つことを願っております。

また、今年はコロナウイルス感染症の影響で中止されていた院内学会を4年ぶりに開催する予定です。同じ病院で働いていても日頃あまり関わりのない部署が、どんな学問的興味を持って業務に臨んでいるのかを知る良い機会です。参加いただいた方からは毎年、「大変勉強になった。自分の業務のモチベーションもアップした。」と好評ですので、今年もぜひ奮ってご参加ください。

私の臨床研究部長としての仕事は3月をもって終了となりますが、今後とも臨床研究部ならびに治験管理室をよろしく願いいたします。



メディカルサポート
センター長 兼
地域医療連携室長

藺田 正浩

新年あけましておめでとうございます。

当院は、私学校跡という歴史ある地に1981年建造され、現在に至ります。古い施設ではありますが、各専門医研修施設として、教育・臨床・研究に力を入れております。

がん、脳卒中、心臓・大血管を三本柱とし、リード抜去や経カテーテルの僧帽弁修復術(MitraClip)などの新しい治療を積極的に導入しており、県外で行っている治療は当院でもできるように努力しております。

また今年も、4月から実施される医師の働き方改革による時間外労働規制が始まる年でもあり、各医療機関で時間管理や休暇取得に向けた取り組みがなされていると思います。当院でも業務整理やタスク・シフト、タスク・シェアリングを含めた対策や取り組みが大変重要な課題になり、多職種協働によるチーム医療を目指しております。医療は細分化・高度化しており、単一の医療機関ですべてを完結させることは難しく、地域の診療所・医院および地域中核病院との連携が今まで以上に必要となります。

メディカルサポートセンターでは、今年も、地域医療連携、入退院支援、がん相談支援を中心として、病院訪問や情報発信により一層努めてまいります。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。



事務部長

織田 政継

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症発生から3年が経過し、感染症法上の分類も2類相当から5類に引き下げられました。街中では、マスクを着用していない人々が増え、外国人を含む観光客も多くなってきており、コロナ禍以前の活気が戻ってきているように感じます。一方、医療機関においては、マスクの着用、イベント等の自粛などの感染対策が継続し、世間とのギャップを感じることも多々ありました。また、患者の受診控などによる患者数減、ガソリン・食品品を始めとする物価高騰など、病院経営にとって厳しい1年でした。

今年は、医療、介護、障害サービスのトリプル改定がおこなわれます。病院の運営はさらに厳しい状況となることが予想されます。また、働き方改革、地域医療構想等々、問題は山積しておりますが、職員の皆様が働きやすい環境を整えてまいりたいと思っております。

令和6年は辰年です。「甲辰(きのえ・たつ)」は、「春の日差しが、あまねく成長を助く年」だそうです。皆様にとって本年が成長できる年になりますことを心からお祈りいたします。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。



看護部長

岸田 佐智子

新年あけましておめでとうございます。

皆様健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

私事ではございますが、令和5年4月に福岡より配置換にて異動してまいりました。

あらためて、よろしくお願いいたします。昨年も看護部門へのご協力ありがとうございました。

新型コロナウイルス感染症が5類にはなりましたが、感染防止対策を行いながら、看護実践に取り組んだ1年だったと思います。また、対話やコミュニケーションを大切に「関係の質」(お互いに尊重し一緒に考える)を高めること、令和6年度・7年度採用に向けての人材確保、人材育成等に取り組んでいます。人を大切にし職務満足が向上することで顧客満足にもつながると思います。

今年も「関係の質」を大切にしながら、ベッドサイドや患者さまのそばで看護が実践できるよう、柔軟な発想を持ち、業務改善及び効率化に取り組んでいきたいと思っております。

地域の皆さまの期待に応えられるような魅力ある病院であるために、より良い看護を実践していきたいと思っております。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

がん治療における アドバンス・ケア・プランニング(ACP)を 考えるワークショップの開催報告



令和5年11月25日(土)に、鹿児島医療センターで「がん医療におけるACPを考えるワークショップ」を開催いたしました。

当院では、令和4年度より多職種によるACP推進委員会を結成し、がん患者のみではなく、循環器・脳卒中の患者に対してもACPの充実に取り組んでいます。

しかし、スタッフからACPの必要性を理解はしているが、患者や家族と「もしもの時の話」をすることが難しいという声がありました。そこで、ACPに取り組む医療者がコミュニケーションスキル「重篤な疾患を持つ患者との話し合いの手引き Serious illness conversation guide を用いた話し合い」を学ぶ機会として、ワークショップを開催することとなりました。

講師の先生は、アドバンス・ケア・プランニングの第一人者である聖隷三方原病院 緩和支援治療科 森雅紀先生と京都大学大学院医学研究科 竹之内沙弥香先生、そして社会医療法人相良病院 博愛会顧問 江口恵子先生をお招きいたしました。ワークショップでは、講義と手引きを用いた話し合いのロールプレイを行いました。

研修参加者は、鹿児島県内の7つの医療機関から55名参加し、その内訳は医師19名、看護師32名、薬剤師1名、心理士2名でした。

研修参加者からは、ロールプレイを通してACPの具体的な進め方を実践でき、ACPについて深く理解できた、患者との話し合いの手引きがとてもわかりやすかった、手引きを手元に置いて話をするので、より良い話し合いができると思う、話すことより聞くことが大切などの感想が聞かれ、実践に活用できるワークショップとなったと思われました。

鹿児島医療センターでは、患者と家族の意向にそった治療・ケアの提供ができるように、今後もACPの充実に取り組んでいきます。そして、今後も「重篤な疾患を持つ患者との話し合いの手引きを活用した話し合い」に関する研修を開催し、鹿児島県のACP推進に貢献していきたいと考えていますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

今回のワークショップ開催にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

(文責：看護師長(教育担当係長) 野口 久美子)

診療科紹介

— 消化器内科 —

いつも大変お世話になっております。

消化器内科は消化器領域の悪性疾患や炎症性疾患の診断・治療および消化管出血などの救急医療に対応しています。当院の特色としては心疾患・脳血管疾患を基礎疾患に対して抗血栓療法を導入されている症例、耳鼻咽喉科・婦人科・血液疾患を基礎疾患に持つ症例が多いことが挙げられます。

2020年4月から6人体制で診療しております。(肝疾患に対しては肝臓学会専門医2名、消化管・胆膵疾患にたいしては消化器病学会・消化器内視鏡学会専門医を含む4名)

消化管・胆膵領域に関しては2022年度より福森 光医師(消化器病学会専門医、消化器内視鏡学会専門医)が済生会川内病院勤務を経て着任しております。消化器領域を幅広く診療しますが、特に消化管・胆膵領域の診断・内視鏡治療を専門としています。2021年度着任の井上和彦医師(消化器病学会専門医、消化器内視鏡学会専門医)も同様です。2022年度より梶原 涼医師、2023年度より和田竣太郎(レジデント)医師が着任し、消化器疾患を幅広く診療し外来・病棟・救急と消化器内科診療を支えています。

また、消化管・胆膵内視鏡治療、消化器領域の化学療法に対して最新の治療方針を提供するよう鋭意研鑽し、「がん診療連携拠点病院」としての役割を果たすべく、一同協力して診療にあたっています。

内視鏡検査・治療に関しては消化器内視鏡専門医の指導の下で対応していますが、機材の関係で小腸疾患に対する内視鏡検査治療に対応できませんので、小腸内視鏡を要する処置は他の内視鏡治療困難症例と合わせて、他医療機関と連携しながら診療しております。

検査件数に関しては内視鏡・外来スタッフやリカバリー室の受け入れ上限の問題から、検査枠の増加は困難な状態が続いています。効率化を目指し、木曜日を内視鏡の特殊検査・治療日としております。皆様にはご迷惑をおかけしますが、引き続き木曜日の消化管・胆膵の外来診療は急患対応に限定して対応させていただきます。ご理解をよろしくお願いいたします。なお、肝臓専門外来は櫻井一宏主任部長、森内昭博部長の2人体制で引き続き毎日診療しています。

皆様のお役に立てるよう日々精進してまいりますので、今後も何卒よろしくお願い申し上げます。

(文責：消化器内科 福森 光)

令和5年度 地域医療支援病院運営委員会 開催

令和5年12月6日（水）、鹿児島医療センター大会議室において「地域医療支援病院運営委員会」を開催いたしました。

当院は『地域医療支援病院』の承認を受け、地域医療・救急医療に力を入れて運営を行っております。コロナ禍の影響から、令和元年度を最後に対面での開催を中止しており、対面での開催は4年ぶりとなりました。

会議には外部委員6名の方々にご出席いただき、院内委員6名を含めた計12名により意見交換がなされました。事務局より近隣医療機関との紹介や逆紹介の状況、救急車搬送・ドクターヘリ受入件数及び医療従事者向けの研修開催状況などが報告され、委員の方々より当院の運営について有益なご質問やご意見をいただきました。また、状況報告だけでなく、「ポストコロナ」の時代での地域医療の在り方や、近年、全国的に問題となっている医師・看護師不足や医師の働き方改革など、今後の医療を取り巻く状況についての貴重な意見交換の場となりました。委員の皆様より頂戴いたしました貴重なご意見を参考にして、今後も地域医療支援病院としての役割を果たして参ります。

（文責：外来係 田村 豪太）



■お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（心臓病・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

(代)TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <https://kagomc.hosp.go.jp/>

メディカルサポートセンター

地域連携室専用FAX▶099(223)1177

※休日・時間外は当直者で対応します。

